# 環境にやさしい在来天敵オオメカメムシ類を用いた園芸作物害虫防除に関する研究

## 1　中核機関・研究総括者

千葉県農業総合研究センター　　上遠野　冨士夫

## 2　研究期間

2002～2004 年度（3 年間）

## 3　研究目的

近年、農産物の安全性強化が叫ばれるとともに、「環境にやさしい農業技術」の開発が求められている。このような状況下で、天敵昆虫の利用が注目を集めている。国内に広く分布する広食性の天敵昆虫オオメカメムシおよびヒメオオメカメムシは、複数種の園芸作物害虫を単独で同時防除できる可能性がある。千葉県農業総合研究センターでは、これまでにオオメカメムシ類の飼育法を開発し、一部の作物の害虫に対する防除効果も確認した。しかし、生物農薬として安定的に大量供給するためには、より安価で高品質な天敵の大量増殖技術の確立が不可欠であり、基礎研究による天敵機能の事前評価や、両種の放飼に伴う自然生態系の生物相への影響評価など、依然として解明すべき点は多い。そこで、生産現場での利用を念頭におき、効率的かつ集中的な研究を行なう。

## 4　研究内容及び実施体制

① オオメカメムシ類を利用した害虫防除法確立のための生態解明（千葉県農業総合研究センター、千葉大学、独立行政法人中央農業総合研究センター）

両種の生理生態について様々な角度から明らかにし、生物的防除資材として利用するための資料とする。

② オオメカメムシ類の大量増殖技術の確立（株式会社キャッツ、千葉県農業総合研究センター）

両種に対する人工飼料の開発を試み、これを用いた大量増殖技術の確立を目指すとともに、品質保持技術の確立をはかる。

③ オオメカメムシ類を用いた害虫防除技術の確立（千葉県農業総合研究センター、千葉大学、独立行政法人中央農業総合研究センター、株式会社キャッツ）

放飼方法及び防除効果の検討や放飼に伴う環境への影響評価等を行い、生物的防除資材としての利用の可否について考察する。

## 5　目標とする成果

オオメカメムシ類の生理生態が明らかとなり、大量増殖技術が確立されるとともに、両種を用いた害虫防除技術が確立される。これにより、生物農薬としてオオメカメムシ類を生産現場で利用する技術が確立され、環境にやさしい持続的な農業技術の発展への大きな貢献が期待される。